

さ　　とう　　ゆう　　し  
佐　　藤　　裕　　史

学位の種類	博士（法学）
学位記番号	法博第28号
学位授与年月日	平成8年3月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院法学研究科 （博士課程後期3年の課程）政治学専攻
学位論文題目	田中正造における政治と宗教
論文審査委員	（主査） 教授 関口 榮 一      教授 柳 父 圀 近

## 論文内容の要旨

田中正造論の中心的論点の一つは木下尚江以来〈政治と宗教〉であったが、政治から宗教への転換を認めるにせよ否定するにせよ、その思想の変化に着目し、後半生に思想的意義を見出すのがこれまでの通例であった。本論文は従来問題とされることの少なかった田中における政治と宗教の内面的関連に着目し、その思想の一貫性、全体像を明らかにしようとする試みである。問題の焦点は政治と宗教の内面的結合環としての〈憲法〉の観念であり、それは理念としての憲法と実定大日本帝国憲法とを相即的に把える特徴をもつ（序一問題の設定）。

田中の政治思想の原像は、儒教的観念による政治理解、〈富国強兵〉のための国民統合の場としての立憲制観、その背後にあるナショナリズムと〈一君万民〉の〈国体〉観等において多くの民権派と共通する。政党は、そこで憲法の理念たる〈一君万民〉の担い手あるいは〈一君万民〉それ自体である〈一国ノ政党〉として、表象される。そこには〈一君万民〉を阻害する藩閥、党派抗争をこととする政党への批判がともに込められているが、現実の田中の行動は党派抗争への積極的参加に終始する（第一章 政党政治家としての田中正造）。

田中が鉾毒問題への干与を深めるころ政党は権力の分担者たる地位を固めつつあったが、政党は結局問題を解決しえず、田中は急速に政党不信に傾く。田中は鉾毒を憲法の定める権利の侵害、〈憲法問題〉と把えたが、反面問題を日本近代化の文脈の中に据える視点到欠けた。この点、鉾毒問題に対する同時代の思想家たちの態度との対照は、近代化と政治体制の構想をめぐる〈自由

主義〉と〈民主主義〉の交錯という興味ある論点を提示する（第二章 憲法問題としての足尾鉍毒事件）。

田中の思想においては運動の論理が宗教に連動する特徴がある。宗教思想の展開軸といえる〈地勢〉の観念は、〈人工〉的鉍毒予防工事の無効をうらづける地理学的観念であると同時に儒教的な〈道〉、〈理〉そのものであり、それを媒介として、〈実践倫理〉としてキリスト教は受容される。それは明治キリスト教一般の性格でもあるが、これによって、人は〈道〉、〈理〉を媒介として神に連続し、神の超越性は失われる。谷中廃村に向かう中、〈天〉、〈地勢〉の引照により〈法律が堤防を破る〉ことを批判しつつ、田中は反政治的な〈自然〉の世界に傾斜するが、〈作為〉として否定される法律に対して憲法は〈天〉、〈自然〉に同定され、憲法を媒介として政治と宗教は連関し、田中は政治の世界につねに還流する。このような田中の思想の特質は、鉍毒事件を通じて田中と接触しやがて分岐した思想家たちとの対比によってさらに明らかになる（第三章 政治と宗教）。

田中の生涯は終始一貫して〈憲法〉、〈一国ノ政党〉の実現に捧げられた。晩年の田中には憲法批判の言辞があるが、憲法と〈広キ憲法〉とは〈精神〉において依然通底し、〈精神〉と運用の重視によって田中は憲法に回帰した。また天皇批判を思わせる言辞も実は天皇の名において権力を行使する者への批判であり、〈一君万民〉の〈国体〉は憲法実施により復活されるべき目標であった（結論）。

## 論文審査結果の要旨

本論文は従来の研究をふまえ、新たな問題意識から田中正造の思想の全体像に迫ろうとする意欲的な労作である。思想の変化を一貫する思想内容を軸に思想の全体構造を把握する、という思想史研究の一つの常道が田中正造に関して採用されたことには、研究史的意義が認められる。田中自身の言辞が个性的かつ断片的で難解なことは田中研究の一つの困難であるが、本論文は个性的な言辞を一般的学問的なそれに置きかえ、断片から体系を再構成することに相当程度成功し、行論はかなり説得的である。また同時代の思想との交錯の視点の導入により叙述に幅が出ていることも評価される。

もちろん問題点も少なくない。田中自身の言辞のあいまいさ、その実定憲法観の不明瞭などに禍されてか〈憲法〉、〈党派〉などの中核的概念の理論的整理が充分といえず、そのため叙述の明晰さが損なわれるばあいがある。また行論を急ぎ、思想やその交錯を多面的に理解するゆとりが欠けるばあいもある。とはいえ、問題設定の妥当性と論旨の説得性において本論文はすでに十分な学問的意義を有し、将来の研究の展開への期待をもうらづけるものである。